クル国遊行考

関　　稔

先年中村元博士のインド学とアジア研究にたいする功績に感謝する記念論文集[V.N.Jha(ed.),KALYĀṆA-MITTA:Professor Hajime Nakamura Felicitatin Volume,Bibliotheca Indo-Buddhica No.86,Delhi,1991]が刊行されたが、そこにO.P.Bharadwaj というインド人学者からBuddha's Sermons in Kurukṣetra[1]（「クル国におけるブッダの説法」）という論稿が寄せられている。それは注を入れても７頁の短いものであり、多くは論証を省いた記述となっているが、前半においてハスティナープラ(Hastinapura)、マハーナガラ(Mahānagara)、スルグナ(Srughna)、ブラーフマナグラーマ(Brahmaṇagrama)、カーラナガラ(Kālanagara)、ローヒタカ(Rohitaka)、バドランカラ(Bhadraṅkara)、トゥッラコッティタ (Thullakoṭṭhita)、カンマーサダンマ(Kammāsadamma)という地名を挙げ、「ブッダは少なくともクル国の九つの場所を訪れた」としており、それらの現在地への比定について凡その見解を付け加えている。たとえば、カンマーサダンマはタネサネ(Thanesar)からカイタル(Kaithal)へ向かった15キロの地点、北緯29度55分・東経70度40分などと指摘する[2]。

同論稿は、後半で以上に挙げられた地名から特にトゥッラコッティタとカンマーサダンマを取り上げ、「ブッダの訪問地として選ばれたことは明らかである」として、この二つを説法の場所とするパーリ経典をマララセーケーラの辞典[3]によって紹介する。該当経典はナーランダー版によって指示しているが、以下においてはPTS版の相当箇所を示し、対応漢訳が

見出される場合はそれを補足する[4]。漢訳の＊印は地名の点でパーリ所伝と一致し、×印は一致しないことを示す。

(a) Suttas delivered at Kammasadhamma （カンマーサダンマで述べられた〔教えを伝える〕経典）：

(i)D.N.15: Mahanidana Sutta(vol.ii,pp.55-71)

"ekaṃ samayaṃ bhagava kurusu viharati, kammasadhammaṃ nama kurunaṃ nigamo."(p.55)

＊『長阿含』13「大縁方便経」（『大正』1，60a-62b)

「一時仏在拘流沙国劫摩沙住処」（60a-b)

＊『人本欲生経』（『大正』1，241c-246a)

「一時仏在拘類国、行拘類国法治処」（241c)

＊『中阿含』97「大因経」（『大正』1，578b-582b)

「一時仏遊拘楼瘦、在剣磨瑟曇拘楼都邑」(578b)

＊『大生義経』（『大正』1，844b-846c)

「一時仏在倶盧聚落」（844b)

(ii)D.N.22: Mahasatipaṭṭhana Sutta(vol.ii,pp.290-315)

"ekaṃ samayaṃ bhagava kurusu viharati.kammasadhammaṃ nama kurunaṃ nigamo."(p.290)

＊『中阿含』98「念処経」（『大正』1，582b-584b)

「一時仏遊拘楼瘦、在劒磨瑟曇拘楼都邑」(582b)

×『増一阿含』12-1（『大正』2，568a-569b)

「一時仏在舎衛国祇樹給孤独園」(568a)

(iii)M.N.10: Satipaṭṭhana Sutta(vol.i,pp.55-63)

"ekaṃ samayaṃ bhagava kurusu viharati, kammasadhamman nama kurunaṃ nigamo."(p.55)

＊『中阿含』98「念処経」（同上)

×『増一阿含』12-1　（同上)

(iv)M.N.75: Magandiya Sutta(vol.i,pp.501-513)

"ekaṃ samayaṃ bhagavā kurusu viharati－kammāsadhamman nāma kurunaṃ nigamo－bhāradvājagottassa brāhmaṇassa agyāgāre tiṇasantharake. "(p.501)

＊『中阿含』153「鬚閑提経」（『大正』1，670a-673a)

「一時仏遊拘楼瘦、在婆羅婆第一静室、坐於草座」(670a)

(v)M.N.106: Ānañjasappāya Sutta(vol.ii,pp.261-266)

"ekaṃ samayaṃ bhagavā kurusu viharati.kammāsadhamman nāma kurunaṃ nigamo."(p.261)

＊『中阿含』75「浄不動道経」（『大正』1，542b-543b)

「一時仏遊拘楼瘦、在劒磨瑟曇拘楼都邑」(542b)

(vi)S.N.xii-60: nidāna(vol.ii, pp.92-93)

"ekaṃ samayṃ bhagavā kurusu viharati kammāsadhammaṃ nāma kurunaṃ nigamo."(p.92)

(vii)S.N.xii-66: sammasam(vol.ii, pp.107-112)

"ekam samayam bhagavā kurusu viharati kammāsadhammam nāma kurunam nigamo."(p.107)

×『雑阿含』291（『大正』2，82a-c)

「一時仏住王舎城迦蘭陀竹園」(82a)

(viii)A.N.x-20: ariyavāsa(vol.v, pp.29-30)

"ekaṃ samayṃ bhagavā kurusu viharati kammāsadhammaṃ nāma kurunaṃ nigamo."(pp.29-32)

×『増一阿含』xlvi-2（『大正』2，775c-776a)

「一時仏在舎衛国祇樹給孤独園」(775c)

(b) Suttas delivered at Thullakoṭṭhita（トゥッラコッティタで述べられた〔教えを伝える〕経典：

(i) M.N.82: Raṭṭhapāla Sutta(vol.ii, pp.54-74)

"ekaṃ samayaṃ bhagavā kurusu caramāno mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ yena thullakoṭṭihtam nāma kurunaṃ nigamo tad avasari" (p.54)

＊『中阿含』132 「頼吒恕羅経」（『大正』 1,623a-628a)

「一時仏遊拘楼瘦、与大比丘衆俱、往至鍮蘆吒、住鍮蘆吒村北尸摂恕園中」(623a)

＊『頼吒和羅経』（『大正』 1，868c-872a)

「一時仏、与五百沙門俱、遊拘留国、転到瓶羅欧吒国」(868c)

＊『護国経』（『大正』 1，872a-875a)

「一時世尊在俱盧城、出遊化利漸漸至于覩羅聚落、与大苾芻衆安止其中」（872a)

Bharadwaj は上記のような伝承によってブッダのクル国訪問を確実視するが、漢訳経典との対比からもわかるようにパーリ経典の伝承も＜一つの伝承にすぎない＞と理解しなければならないものである。クル国は現今のデリーの北方に位置した一帯であり、最初期の仏教活動の重要な拠点（クル国寄りの西方では、サーヴァッティーとかヴァーラーナシーあるいはコーサンビー）からは相当の遠隔地となる。たんに遠隔であるということだけでブッダの訪問を否定することはできないが、また特定の系統の経典や律等の伝承だけで肯定することも早計となろう。

さて、本稿の当面の意図はブッダのクル国訪問の真偽を検証することであるが、すでにこの件については以下のように二様の理解がある。

中村元博士は「後代の仏伝によると、釈尊は、東はヴァンガ国、西はコーサンビー、マトゥラーからガンダーラに至るまで教化したということになっている。しかしそれは疑わしい。かれの活動範囲は大体ガヤーや王舎城からパトナ、クシナガラ、カピラヴァットゥに至る線を中心としたものであり、西方に向ってはベナレスから昔のシュラーヴァスティー、アッ

ラハーバードの東のコーサンビーに至る範囲であったらしい」[5]と述べて、コーサンビー以西への教化について否定的である。

たいして、前田惠学博士は「〔パーリ五部の調査から〕仏陀の直接教化の地域を、次のように限定することができるであろう。

（一）先ず第一に、仏陀が直接教化すること多く、従ってまた教団の主力が存在したと考えられるのは、Savatthiと Rajagahaとの二都市を焦点として、Vesali, Pava, Kusinara, Kapilavatthu, Saketa, Kosambi, Baranasiの諸都市を含む、ほぼ楕円形の地域である。中でも、Savatthi-Kapilavatthu-Pava-Vesali-Rajagaha-Baranasiを結ぶ線上に、最も大きな根幹があったものと見ることができる。

（二）さらに広く、仏陀直接教化の地域の最大限を求めるならば、東はKajangala, 南はDakkhinagiriまで、また稀にCetiにまでその足跡が及んだことがあったとしても、Yamuna河以南に赴かれたことはほとんどなく、西北はKuruのKammasadammaあたりまで、北はヒマヤラによって自然に限られる」[6]として、ブッダの足跡がクルにまで及んだことに肯定的である。

前田博士はさらに「(二)の範囲[そこにKuruが入る]はやはり仏陀自身で教化された地域であって、仏陀入滅後の教団の拡大を示すが如きものでもない。仏陀の教化がKuruないしKammasadammaあたりまで及んだことは、多くはないにしてもいくつかの文献的権証をあげることができる。すなわち、

(a)多数の経典がKammasadammaを説所としている。

(b)Kuru国のThullakotthita を説所とするものもある。

(c)比丘Magandiya やRatthapalaが、仏陀のKuru行の結果出家したものであるとされている。

(d)Mittakali およびNanduttaraのような比丘尼もKammasadamma出身であるとされている。

これらの資料に現れたKuruと仏陀との関係が否定しつくされなくては、仏陀の足跡がKuruに及ばなかったと主張することはできないであろう」[7]

と述べ、経典の記述を有力な証拠として示すものである。ここで言われる文献的権証は、先のBharadwaj の挙げるものでもある。

「スバッダよ、私は二十九の歳に、善なるものを求めて出家した。スバッダよ、私が出家してから、五十年あまりとなった。正理と法の領域で活動する、このほかに沙門なるものはない[8)]」とは、ブッダの最晩年のことばとして伝えられるところであるが、かりに五十年近くの長きにわたる教化のための遊行生活が連続していたとすれば、その期間だけを考慮すれば仏教興隆地から相当の遠隔地にまでブッダ自身が足跡をしるすことができたはずだと推測することが許されよう。くわえて、上に指摘されたようないくつかの経典の遠隔地訪問の記述に依拠するならば、たとえば前田博士の言われるようなことが正当なのかもしれない。

しかしながら、経典に記述があるというだけで訪問を確言することはいささか困難ではないか、というのが小論の指摘となる。そこで、上掲の経典群から「ラッタパーラ（護国）経[9)]」を取り上げ、そこにおける訪問記事の現実性について若干の検討をくわえる。参考にパーリ語所伝の和訳を注のかたちで紹介したが、全体の内容と展開を見るためにそこで付加した小見出しを列挙すれば次の如くである。

＜A．前段＞

1．ブッダ、クル国のトゥッラコッティタの町に入る。

2．ラッタパーラ、ブッダに出家を願い出る。

3．ラッタパーラ、三度の懇請で両親から出家の許しを得る。

4．ラッタパーラ、最高の聖者（阿羅漢）となる。

＜B．後段＞

1．ラッタパーラ、生家を訪れる。

2．コーラヴィヤ王、四つの『衰え』について語る。

3．ラッタパーラ、四つの『この世界』についての教えを語る。

以上のように、この経典はクル国のトゥッラコッティタという町出身の青年ラッタパーラの出家の経緯を述べる前段と、出家後のラッタパーラと当地のコーラヴィヤ王との対話を伝える後段とに分けることができる。コーラヴィヤ王との対話においてラッタパーラの真の出家の動機が何であったかが問題にされ、それがブッダの＜四つの教え＞を通じての無常性・変異性(asassata- vipparināmadhamma-) の感得であったことが明らかにされるのが後段であり、ここが主要部であると考えでよい。たいして前段は、ここでブッダの考えを伝えることになる人物ラッタパーラの立場を説明するだけの導入部とでもいうべき部分である。ブッダの教えを語る役割を担わされた仏弟子ラッタパーラに、いわば威信をもたせるという効果がねらいであろう。

ところで、問題のブッダのクル国遊行は前段で述べられる。ブッダが多くの修行僧とともにトゥッラコッティタの町に入り、そこでの出会いが契機となってラッタパーラが出家を決意する。ラッタパーラは両親の許しを得て出家し具足戒を受けて正規の修行者となる。そうした経緯の後にブッダはラッタパーラを伴ってサーヴァッティーに向かう。ラッタパーラはそこで修行を重ねて最高の聖者という立場を得る。こうした前段の筋立てからは、ラッタパーラというクル国出身の一人の修行僧とその修行地としてのサーヴァッティーの存在を主として読み取るべきであろう。

(1)経典等にクル国訪問を伝える記事が少ない。

(2)その記事が必ずしも事実を伝えるわけではない。

(3)同系の経典でも所伝によって異なる場合がある。

などの側面を重視するならば、ブッダのクル国訪問については否定的にならざるを得ない。

平川彰博士はブッダの入滅からアショーカ王の時代にいたる仏教教団の地理的な勢力拡大の速度から見てブッダ時代の勢力範囲にさほどの遠隔地は含まれないとされたが[10]、小論はその結論にたいしては与することとなる。

クル国遊行考（関）

1）同論稿は、O.P.Bharadwaj, ANCIENT KURUKṢETRA, Studies in Historical & Cultural Geography, pp.75-83, New Delhi 1991. にもそのまま収録されている。
2）＜東経70度＞ではインダスの西岸になり、これは＜76度＞の誤植かと思われる。
3）G.P.Malalasekera, Dictionary of Pali Proper Names,2 vols,repr.,London 1960.
4）赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』（昭和42年復刊）などによっておおよその検索は容易である。
5）中村元『ゴータマ・ブッダⅠ』（選集〔決定版〕第11巻）735-736 頁。
＜後代の仏伝＞として『仏所行讃』巻第四が注に挙げられているが、『仏所行讃』には「〔ブッダは〕倶舎弥(Kauśambi=Kosambi)国に至りて瞿師羅を化度し、……揵陀羅(Gandhara)国に至り、阿婆羅龍を度したまえり」（大正4，40c)とあり、コーサンビーの次にガンダーラが出る。ちなみに、クル国のトゥッラコッティタでの教化については「摩偸羅(Mathura) 国に至りて鬼竭曇摩を度し、偸羅俱瑟吒において頼吒波羅を度したまえり」と並べ、マトゥラーでの活動に連続するかのような記述である。ブッダの最初の説法地であるヴァーラーナシーから西方へ向かってコーサンビー、マトゥラーへ、北上してトゥッラコッティタへ、さらにガンダーラに至る交通路が想定される。
6）前田惠学『原始仏教聖典の成立史研究』68頁。
7）同上、69頁。この考えは『仏教要説』にも継承され、＜仏教中国＞に触れて「〔仏教中国の〕範囲は、仏陀の直接教化の最大限の範囲と、ほぼ一致している」とする。
8）D.N.ii, p.151；『長阿』巻4（『大正』1，25b）
9）『中部経典』第82「ラッタパーラ経」(M.N.82: Raṭṭhapāla-s.; vol.ii, pp.54-74）。和訳としては、『南伝大蔵経』第十一巻下(72-99頁、青原慶哉訳）、『ブッダのことばⅢ』(67-93頁、草間法照訳)などがある。草間訳には原文にある重複表現や冗長な陳述を避けるための省略や言い換えの工夫がある。本訳では、原文に省略の指示がある部分はべつとして、できるだけ逐語的な全訳を試みた。底本としたPTS版には校訂上の問題点があるが、いまは触れていない。以下の記号を付した小見出しは、全体の展開を概観するための便宜上のものである。

＜A．前段＞

〔1．ブッダ、クル国のトゥッラコッティタの町に入る〕

このように私は聞いた。あるとき世尊は、クル国を遍歴していたとき、多くの修行僧とともにトゥッラコッティタというクルの町に入られた。トゥッラコッティタのバラモンや家長たちは聞いた。「シャカ族の人であり、シャカ族の家から出家し

た沙門ゴータマが、クル国を遍歴し、多くの修行僧とともにトゥッラコッティタに到着した。かの尊敬すべきゴータマには、『尊敬に値する人（阿羅漢）・正しく覚った人（正等覚者）・知と行のある人（明行足）・善く逝った人（善逝）・世間を理解した人（世間解）・最上の人（無上士）・馴らされるべき人々の御者（調御丈夫）・神々と人間の師（天人師）・仏・世尊である』との好ましい名声があがっている。かの人は、神々を含み魔を含み梵天界を含むこの世界を、沙門とバラモンを含み神々と人間を含む生きとし生けるものをみずから了知し、了解して、知らしめられる。かの人は、初め好ましく中ほど好ましく終わり好ましい、意義のある、明快な教えを示し、欠けるところのない完全に純化された清浄な生活を明らかにされる。そのような尊敬に値する人々にまみえることは、結構なことだ」と。

そこで、トゥッラコッティタのバラモンや家長たちは世尊のおられるところへ近付いた。近付いて、ある者たちは、世尊に敬礼して、一方に坐った。ある者たちは、世尊と親愛にみちた丁重なことばを交わして挨拶し、一方に坐った。ある者たちは、世尊のおられる方に合掌した手を差し伸べて、一方に坐った。ある者たちは、世尊の近くで名と姓を告げて、一方に坐った。ある者たちは、沈黙して、一方に坐った。世尊は、一方に坐ったトゥッラコッティタのバラモンや家長たちを、法話によって説諭し激励し鼓舞し歓喜させられた。

〔2．ラッタパーラ、ブッダに出家を願い出る〕

そのとき、ラッタパーラという名の良家の子息がいた。そのトゥッラコッティタでは第一の家門の子息であったが、その集まりに坐っていた。良家の子息であるラッタパーラは、このように思った。「私が世尊によって示された教えを理解するごとくであれば、まったく欠けるところのない完全に純化された螺貝のように磨かれた清浄な生活を、在家の生活を送っている者が行なうことは容易なことではない。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ろう」と。さて、トゥッラコッティタのバラモンや家長たちは、法話によって説諭され激励され鼓舞され歓喜させられて、世尊の語られたことに歓喜し満足して、席から立って世尊に敬礼し、右回りにめぐって出て行った。良家の子息であるラッタパーラは、トゥッラコッティタのバラモンや家長たちが出て行って程なく、世尊のおられるところへ近付いた。近付いて、世尊に敬礼し、一方に坐った。一方に坐った良家の子息であるラッタパーラは、世尊に、このように申し上げた。「尊師よ、私が世尊によつて示された教えを理解するごとくであれば、まったく欠けるところのない完全に純化された螺貝のように磨かれた清浄な生活を、在家の生活を送っている者が行なうことは容易なことではありません。尊師よ、私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入りたいと思います。尊師よ、私は世尊のもとで出家し、完

全な戒を得たいのです」と。

「ところで、ラッタパーラよ、お前は家を出て家なき生活に入ることについて両親から許しを得たのか」

「いいえ、尊師よ、私は家を出て家なき生活に入ることについて両親から許しを得ておりません」

「ラッタパーラよ、如来たちは両親から許しを得ていない者を出家させることはないのだ」

「それでは私は、尊師よ、私が家を出て家なき生活に入ることについて両親が許してくれるように、やってみたいと思います」

〔3．ラッタパーラ、三度の懇請で両親から出家の許しを得る〕

さて、良家の子息であるラッタパーラは、席から立って世尊に敬礼し、右回りにめぐって両親のいるところへ近付いた。近付いて、両親に、このように言った。「母よ父よ、私が世尊によって示された教えを理解するごとくであれば、まったく欠けるところのない完全に純化された螺貝のように磨かれた清浄な生活を、在家の生活を送っている者が行なうことは容易なことではありません。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入りたいと思います。私が家を出て家なき生活に入ることについて、許しを与えてください」と。このように言われて、良家の子息であるラッタパーラの両親は、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「愛するラッタパーラよ、お前は愛しく好ましい私たちの一人息子だ。安らかに生活し、安からに育まれた。愛するラッタパーラよ、お前はいかなる苦しみをも知らない。さあ、愛するラッタパーラよ、お前は食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しみなさい。私たちはお前が家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えません。たとえお前が死んだとしても、私たちはいなくなって欲しくない。どうして、生きているお前が家を出て家なき生活に入ることについて、私たちが許しを与えられるだろうか」と。

再び、……三たび、良家の子息であるラッタパーラは、両親に、このように言った。「母よ父よ、私が世尊によって示された教えを理解するごとくであれば、まったく欠けるところのない完全に純化された螺貝のように磨かれた清浄な生活を、在家の生活を送っている者が行なうことは容易なことではありません。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入りたいと思います。私が家を出て家なき生活に入ることについて、許しを与えてください」と。三たび、良家の子息であるラッタパーラの両親は、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「愛するラッタパーラよ、お前は愛しく好ましい私たちの一人息子だ。安

らかに生活し、安らかに育まれた。愛するラッタパーラよ、お前はいかなる苦しみをも知らない。さあ、愛するラッタパーラよ、お前は食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しみなさい。私たちはお前が家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えません。たとえお前が死んだとしても、私たちはいなくなって欲しくない。どうして、生きているお前が家を出て家なき生活に入ることについて、私たちが許しを与えられるだろうか」と。

良家の子息であるラッタパーラは、両親のもとで出家の許しが得られず、「このままここで私は死ぬか、さもなくば出家できるか」と言って、そのままそこで地面にじかに横たわった。

そこで、良家の子息であるラッタパーラの両親は、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「愛するラッタパーラよ、お前は愛しく好ましい私たちの一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。愛するラッタパーラよ、お前はいかなる苦しみをも知らない。さあ、愛するラッタパーラよ、お前は食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しみなさい。私たちはお前が家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えません。たとえお前が死んだとしても、私たちはいなくなって欲しくない。どうして、生きているお前が家を出て家なき生活に入ることについて、私たちが許しを与えられるだろうか」と。このように言われて、良家の子息であるラッタパーラは沈黙した。再び、……三たび、良家の子息であるラッタパーラの両親は、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「愛するラッタパーラよ、お前は愛しく好ましい私たちの一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。愛するラッタパーラよ、お前はいかなる苦しみをも知らない。さあ、愛するラッタパーラよ、お前は食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しみなさい。私たちはお前が家を出て家なき生活に入ることについて、許しを与えません。たとえお前が死んだとしても、私たちはいなくなって欲しくない。どうして、生きているお前が家を出て家なき生活に入ることについて、私たちが許しを与えられるたろうか」と。三たび、良家の子息であるラッタパーラは沈黙した。

さて良家の子息であるラッタパーラの両親は、良家の子息であるラッタパーラの友人たちのいるところへ近付いた。近付いて、良家の子息であるラッタパーラの友人たちに、このように言った。「みなさん、この良家の子息であるラッタパーラは『このままここで私は死ぬか、さもなくば出家できるか』と言って、じかに地面に横たわっています。さあ、みなさん、良家の子息であるラッタパーラのいるところへ近付いてください。近付いて、良家の子息であるラッタパーラに、このように

言ってください。『友ラッタパーラよ、君は両親の愛しく好ましい一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。友ラッタパーラよ、君はいかなる苦しみをも知らない。さあ、友ラッタパーラよ、食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しむべきです。両親は君が家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えないだろう。たとえ君が死んだとしても、両親はいなくなって欲しくないだろう。どうして、生きている君が家を出て家なき生活に入ることについて、かれらが許しを与えられるだろうか』と」

良家の子息であるラッタパーラの友人たちは、良家の子息であるラッタパーラの両親に同意して、良家の子息であるラッタパーラのいるところへ近付いた。近付いて、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「友ラッタパーラよ、君は両親の愛しく好ましい一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。友ラッタパーラよ、君はいかなる苦しみをも知らない。さあ、友ラッタパーラよ、食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しむべきです。両親は君が家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えないでだろう。たとえ君が死んだとしても、両親はいなくなって欲しくないだろう。どうして、生きている君が家を出て家なき生活に入ることいついて、かれらが許しを与えられるだろうか」と。このように言われて、良家の子息でラッタパーラは沈黙した。再び、……三たび、良家の子息であるラッタパーラの友人たちは、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「友ラッタパーラよ、君は両親の愛しく好ましい一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。友ラッタパーラよ、君はいかなる苦しみをも知らない。さあ、友ラッタパーラよ、食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しむべきです。両親は君が死んだとしても、両親はいなくなって欲しくないだろう。どうして、生きている君が家を出て家なき生活に入ることについて、かれらが許し与えられるだろうか」と。三たび、良家の子息であるラッタパーラは沈黙した。

良家の子息であるラッタパーラの友人たちは、良家の子息であるラッタパーラの両親のいるところへ近付いた。近付いて、良家の子息であるラッタパーラの両親に、このように言った。「母よ父よ、この良家の子息であるラッタパーラは『このままここで私は死ぬか、さもなくば出家できるか』と言って、そのままあそこでじかに地面に横たわっています。もしあなたがたが、良家の子息であるラッタパーラが家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えないならば、そのままあそこで死んでしまうでしょう。たとえあなたがたが、良家の子息であるラッタパーラが家を出て家なき生活に入ることについて許しを与えたとしても、出家したかれにまみえ

ることができるでしょう。かりに良家の子息であるラッタパーラが家を出た家なき生活を楽しまなくなるとすれば、かれに他にどのような行方があるでしょうか。そのままここに戻ってくるに違いありません。良家の子息であるラッタパーラが家を出て家なき生活に入ることについて、許しを与えてやってください」と。

「みなさん、良家の子息であるラッタパーラが家を出て家なき生活に入ることについて、許しを与えてやりましょう。しかし、出家したならば両親に教えに来なければなりません」

良家の子息であるラッタパーラの友人たちは、良家の子息であるラッタパーラのいるところへ近付いた。近付いて、良家の子息であるラッタパーラに、このように言った。「〔友ラッタパーラよ、君は両親の愛しく好ましい一人息子だ。安らかに生活し、安らかに育まれた。友ラッタパーラよ、君はいかなる苦しみをも知らない。さあ、友ラッタパーラよ、食べ飲み愉快にやりなさい。食べ飲み愉快にやり、もろもろの欲望の対象を享受し、もろもろの善行を行ないながら、楽しむべきです。〕家を出て家なき生活に入ることについて、君は両親から許しを与えられた。しかし、出家したならば両親に教えに来なければならない」

そこで、良家の子息であるラッタパーラは力を得て、世尊のおられるところへ近付いた。近付いて、世尊に敬礼し、一方に坐った。一方に坐った良家の子息であるラッタパーラは、世尊に、このように申し上げた。「尊師よ、家を出て家なき生活に入ることについて、私は両親から許しを与えられました。世尊は私を出家させてください」と。良家の子息であるラッタパーラは、世尊のもとで出家することができた。完全な戒を得ることができた。

〔4．ラッタパーラ、最高の聖者（阿羅漢）となる〕

さて、尊者ラッタパーラが完全な戒を得て程ないころであったが、完全な戒を得てから半月が経ったとき、世尊はトゥッラッコティタで意のままに過ごしてから、サーヴァッティー（舎衛城）のある方に向かって遍歴に出られた。つぎつぎに遍歴して、サーヴァッティーに入られた。世尊はそこサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園（祇樹給孤独園）で過ごされた。尊者ラッタパーラはひとり隠遁し、怠ることなく努力し、意志かたく過ごしていたが、程なくして、良家の子息たちが正しく家を出て家なき生活に入る目的である、その最高の清らかな修行の極致を、目の当たりにみずから知り、体現し、達成した。『生は尽きた。清らかな修行は成就された。なすべきことはなされた。もはやこの生存に至ることはない』と了解した。尊者ラッタパーラは、尊敬に値する人（阿羅漢）のひとりとなった。

＜B．後段＞

〔1．ラッタパーラ、生家を訪れる〕

さて、尊者ラッタパーラは世尊のおられるところへ近付いた。近付いて、世尊に敬礼し、一方に坐った。一方に坐った尊者ラッタパーラは、世尊に、このように申し上げた。「尊師よ、もし私に世尊のお許しがあれば、私は両親を教えに行きたいと思います」と。

世尊は尊者ラッタパーラの考えを心中で考察された。世尊は『良家の子息であるラッタパーラが修学を放棄して世俗に戻ることはあり得ない』と知り、尊者ラッタパーラに、このように言われた。「ラッタパーラよ、お前が適当だと思う時に、行きなさい」と。

尊者ラッタパーラは、席から立って世尊に敬礼し、右回りにめぐり、座臥具を畳み、鉢と衣を持ち、トゥッラコッティタのある方に向かって遍歴に出た。つぎつぎに遍歴して、トゥッラコッティタに入った。尊者ラッタパーラはそこトゥッラコッティタにあるコーラヴィヤ王のミガーチーラの園に滞在した。さて、尊者ラッタパーラは午前中に身繕いをし、鉢と衣を持って、トゥッラコッティタに托鉢のために入った。トゥッラコッティタを順序をおって托鉢して行き、自分の父親の屋敷がある方へ近付いた。そのとき、尊者ラッタパーラの父親が、中央の門口の部屋で髪をすかせていた。尊者ラッタパーラの父親は尊者ラッタパーラが遠くからやって来るのを見付けた。見付けて、このように言った。「このような禿頭の沙門のために、私たちの愛しく好ましい一人息子が出家させられてしまった」と。そのとき、尊者ラッタパーラは、自分の父親の屋敷で施しも拒絶の挨拶も得られず、得たのはただ侮辱だけであった。

おりしも、尊者ラッタパーラの親戚の下女が前夜の粥を捨てようしていた。そこで、尊者ラッタパーラは、その親戚の下女に、このように言った。「娘よ、それが捨ててよいものなら、この私の鉢に入れてください」と。

親戚の下女はその前夜の粥を尊者ラッタパーラの鉢に入れながら、尊者ラッタパーラの手や足や声の特徴をつかんだ。尊者ラッタパーラの親戚の下女は、尊者ラッタパーラの母親のいるところへ近付いた。近付いて、尊者ラッタパーラの母親に、このように言った。「奥さま、ご承知ください。ご子息のラッタパーラさまがやって来られました」と。

「これ、お前が真実を話しているなら、もう下女はしなくてもよいのだよ」と言って、尊者ラッタパーラの母親は尊者ラッタパーラの父親のいるところへ近付いた。近付いて、尊者ラッタパーラの父親に、このように言った。「旦那さま、ご承知でしょうか。良家の子息であるラッタパーラがやって来たということですが」と。

そのとき、尊者ラッタパーラはその前夜の粥を壁にもたれて食べていた。尊者ラッタパーラの父親は尊者ラッタパーラのいるところへ近付いた。近付いて、尊者ラッタパーラに、このように言った。「とんでもないことだ、愛するラッタパーラよ、お前が前夜の粥を食べるとは。愛するラッタパーラよ、どうして自分の家に入らないのか」と。

「家長よ、家を出て家なき生活に入った私どもに、どこに家があるのでしょうか。家長よ、私どもは家なき者です。家長よ、私どもはあなたの家へ行きました。そこでは施しも拒絶の挨拶も得られず、得たのはただ侮辱だけでした」

「さあ、愛するラッタパーラよ、家へ行こう」

「だめです、家長よ、今日は私の食事は済みました」

「では、愛するラッタパーラよ、明日は食べものを受けて欲しい」

尊者ラッタパーラは沈黙によって承諾の意を表した。尊者ラッタパーラの父親は尊者ラッタパーラの承諾を知り、自分の屋敷のある方へ近付いた。近付いて、黄金と金貨の大きな山を作らせ、筵で覆いをさせておいて、尊者ラッタパーラの以前の妻たちに告げた。「嫁たちよ、以前、お前たちは装身具で美しく飾り、良家の子息であるラッタパーラの愛しく好ましく思うところであった。そのような装身具で美しく飾りない」と。尊者ラッタパーラの父親は、その夜が明けると、自分の屋敷に美味な硬軟の食べものを用意させ、尊者ラッタパーラにたいし時を告げさせた。「愛するラッタパーラさま、時間です。食事が調えられました」と。そこで、尊者ラッタパーラは午前中に身繕いをして、鉢と衣を持ち、自分の父親の屋敷がある方へ近付いた。近付いて、用意された席に坐った。尊者ラッタパーラの父親はその黄金と金貨の山を開けさせ、尊者ラッタパーラに、このように言った。「愛するラッタパーラよ、これはお前の母親の財産、そちらは父親の財産、あちらは祖父の財産である。愛するラッタパーラよ、財産を享受しても善行を行なうことができるのです。さあ、愛するラッタパーラよ、修学を放棄して世俗の生活に戻り、財産を享受しなさい。そして、善行を行ないなさい」と。

「家長よ、もし私の言うことを聞いてくれるなら、この黄金と金貨の山を車に積んで運び出させ、ガンジス河の流れの真ん中に沈めさせてください。それは何故かといえば、家長よ、それに因ってあなたに悲しみ・嘆き・苦しみ・気落ち・惑いが生ずることになるからです」

そのとき、尊者ラッタパーラの以前の妻たちは、こもごも両足をつかんで、尊者ラッタパーラに、このように言った。「ご子息さま、あなたが清浄な修行生活をするのは、いったい、どのような天女たちのためなのでしょうか」

「姉妹たちよ、私どもが清浄な修行生活をするのは、天女たちのためではありません」

「ご子息のラッタパーラさまが、私たちに姉妹ということばで呼び掛けられた」と言って、そのままそこに気を失って倒れてしまった。

尊者ラッタパーラは、父親に、このように言った。「家長よ、もし施してよい食べものがあるなら、施してください。私どもを困らせないで下さい」と。

「食べてください、愛するラッタパーラよ。食事は調えられています」と言って、尊者ラッタパーラの父親は、尊者ラッタパーラを美味な硬軟の食べものでもって手ずから満足させ、もてなした。

尊者ラッタパーラは食事を済ませ、鉢にそえた手を離し、立ったまま、このような詩句を唱えた。

見なさい、装い飾った身体を。それは傷のかたまり、寄せ集め、
病むもの、多くの思惑の対象。そこに確かなもの、常なるものはない。

見なさい、宝石と耳輪で装い飾った姿を。
衣装によって輝いてはいるが、骨と皮で覆われたもの。

染料で赤くした足、白粉を塗りこめた顔。
愚か者が迷うにはそれで十分、しかし彼岸を求める者にとってはそうではない。

八束に編んだ髪、アンジャナ膏を塗った眼。
愚か者が迷うにはそれで十分、しかし彼岸を求める者にとってはそうではない。

新しいアンジャナ膏の容器のように奇麗だが、飾り立てた腐敗のかたまり。
愚か者が迷うにはそれで十分、しかし彼岸を求める者にとってはそうでない。

猟師が罠を置いたが、鹿は網に近寄らなかった。
餌を食べたら、鹿捕りが嘆いているあいだに、立ち去ろう。

尊者ラッタパーラは立ったままこのように詩句を唱え、コーラヴィヤ王のミガーチーラの園がある方へ近付いた。近付いて、日中を過ごすために一本の樹木の根元に坐った。

〔2．コーラヴィヤ王、四つの『衰え』を語る〕

さて、コーラヴィヤ王は猟師に告げた。「これ猟師よ、ミガーチーラの遊園を清

めよ。われらは美しい大地を見るためにでかける」と。「わかりました、王よ」と応え、ミガーチーラの園を清めていたとき、猟師は尊者ラッタパーラが日中を過ごすために一本の樹木の根元に坐っているのを見付けた。見付けて、コーラヴィヤ王のいるところへ近付いた。近付いて、コーラヴィヤ王に、このように言った。「王よ、ミガーチーラの園は清らかになりました。そこにラッタパーラという名の良家の子息がいます。あなたさまがしばしば称賛されていた、ここトゥッラコッティタでは第一の家門の子息です。彼が日中を過ごすために一本の樹木の根元に坐っています」と。

「そういうことであれば、これ猟師よ、今日は遊園はやめにしよう。今われらは、かの尊者ラッタパーラに敬意を表することにしよう」

コーラヴィヤ王は「そこに用意した硬軟の食べもの、そのすべてを差し出しなさい」と言って、次々に華麗なる車をつながせ、華麗なる車に乗り、次々に華麗なる車を従えて、尊者ラッタパーラに会うために、大いなる王の威厳をになってトゥッラコッティタを出立した。車で行けることろまでは車で行き、車から下りて徒歩となり、次々に高位の従者を従え、尊者ラッタパーラのいるところへ近付いた。近付いて、尊者ラッタパーラと親愛にみちた丁重なことばを交わして挨拶し、一方に立った。

一方に立ったコーラヴィヤ王は、尊者ラッタパーラに、このように言った。「敬愛するラッタパーラは、この象の背の敷物にお坐りください」と。

「結構です、大王よ、あなたがお坐りください。私は自分の坐具に坐っています」

コーラヴィヤ王は用意された席に坐った。坐って、コーラヴィヤ王は尊者ラッタパーラに、このように言った。「このような四つの衰えがあります。それによって、ここにいるある人々は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。何々が四つでしょうか。老いの衰え、病の衰え、財の衰え、親族の衰えです。敬愛するラッタパーラよ、どのようなもが老いの衰えでしょうか。敬愛するラッタパーラよ、ここに、古び、老い、年取り、齢重ね、晩年に至った人がいるとします。彼は次のように考えます。『私は今や古び、老い、年取り、齢重ね、晩年に至った。私が未獲得の財産を獲得したり、既得の財産を殖やすことは、容易ではない。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ることにしよう』と。彼はその老いの衰えにとり付かれ、髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。敬愛するラッタパーラよ、これが老いの衰えと言われます。敬愛するラッタパーラは、いま年少若年の若者であり、髪黒く、青春期の輝かしい若さをそなえている。その老いの衰えは敬愛するラッタパーラにはない。敬愛するラッタパーラは、なにを知り、あるいは見、あるいは聞いて、家を

出て家なき生活に入ったのだろうか。

敬愛するラッタパーラよ、どのようなものが病の衰えでしょうか。敬愛するラッタパーラよ、ここに、病み苦しむ重病人がいるとします。彼は次のように考えます。『私は今や病み苦しむ重病人である。私が未獲得の財産を獲得したり、既得の財産を殖やすことは、容易でない。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家で出て家なき生活に入ることにしよう』と。彼はその病の衰えにとり付かれ、髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。敬愛するラッタパーラよ、これが病の衰えと言われます。敬愛するラッタパーラは、いま病なく健やかで、熱すぎもせず冷えすぎもしない性能のよい消化器官をそなえています。その病の衰えは敬愛するラッタパーラにはない。敬愛するラッタパーラは、なにを知り、あるいは見、あるいは聞いて、家を出て家なき生活に入ったのだろうか。

敬愛するラッタパーラよ、どのようなものが財の衰えでしょうか。敬愛するラッタパーラよ、ここに、豊かで大財を持つ富豪がいるとします。彼のその財産がやがて無くなります。彼は次のように考えます。『私は以前豊かで大財を持つ富豪であった。私のその財産はやがて無くなってしまった。私が未獲得の財産を獲得したり、既得の財産を殖やすことは、容易ではない。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ることにしよう』と。彼はその財の衰えにとり付かれ、髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。敬愛するラッタパーラよ、これが財の衰えと言われます。敬愛するラッタパーラは、ここトゥッラコッティタでは第一の家門の子息です。その財の衰えは敬愛するラッタパーラにはない。敬愛するラッタパーラは、なにを知り、あるいは見、あるいは聞いて、家を出て家なき生活に入ったのだろうか。

敬愛するラッタパーラよ、どのようものが親族の衰えでしょうか。敬愛するラッタパーラよ、ここに、多くの朋友血縁のある人がいるとします。彼のその親戚がやがていなくなります。彼は次のように考えます。『私には以前多くの朋友血縁がいた。その私の親戚がやがていなくなってしまった。私が未獲得の財産を獲得したり、既得の財産を殖やすことは、容易ではない。私は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ることにしよう』と。彼はその親族の衰えにとり付かれ、髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。敬愛するラッタパーラよ、これが親族の衰えと言われます。敬愛するラッタパーラには、ここトゥッラコッティタに多くの朋友血縁がいます。その親族の衰えは敬愛するラッタパーラにはない。敬愛するラッタパーラは、なにを知り、あるいは見、あるいは聞いて、家を出て家なき生活に入ったのだろうか。

敬愛するラッタパーラよ、これらが四つの衰えであり、それによって、ここにいるある人々は髪と髭を剃り落とし、僧衣をまとい、家を出て家なき生活に入ります。

それらが敬愛するラッタパーラにはない。敬愛するラッタパーラは、なにを知り、あるいは見、あるいは聞いて、家を出て家なき生活に入ったのだろうか」

〔3．ラッタパーラ、四つの『この世界』についての教えを語る〕

「大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された四つの教えがあります。それらを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました。四つとは、何でしょうか。『この世界は、不確かで、いざなわれゆく』というのが、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された第一の教えです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました。『この世界は、護りになるものがなく、頼りになるものがない』というのが、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された第二の教えです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました。『この世界は、持ちきれないところ、すべてを捨てて去らねばならぬところ』というのが、大王よ尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された第三の教えです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました。『この世界は、充足のないところ、満足のないところ、飽くなき欲望の奴隷』というのが、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された第四の教えです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました。これらが、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が示された四つの教えです。それらを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました」

「『この世界は、不確かで、いざなわれゆく』と敬愛するラッタパーラは言われました。敬愛するラッタパーラよ、このによう語られたことに、どのように意義を認めるべきでしょうか」

「いかがでありましょうか、大王よ。あなたは、二十歳のときにも二十五歳のときにも、象をもよく操り、馬をもよく操り、車をもよく操り、弓をもよく操り、刀をもよく操り、腿に力があり、腕に力があり、有能で、戦をわがものとしていましたか」

「敬愛するラッタパーラよ、私は、二十歳のときにも二十五歳のときにも、象をもよく操り、馬をもよく操り、車をもよく操り、弓をもよく操り、刀をもよく操り、腿に力があり、腕に力があり、有能で、戦をわがものとしていました。敬愛するラッタパーラよ、ときには神通力がそなわっていたと思います。力で私に匹敵する者を見たことがありません」

「いかがでありましょうか、大王よ。同じように、あなたは今も腿に力があり、

腕に力があり、有能で、戦をわがものとしていますか」

「そうではありません、敬愛するラッタパーラよ。今や古び、老い、年取り、齢重ね、晩年に至っており、八十歳となっております。敬愛するラッタパーラよ、ときどき私は『こちらへ歩を進めよう』と思っても、あらぬ方向へ歩を進めるありさまです」

「まさにそうしたことについて、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、不確かで、いざなわれゆく』と語られたのです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました」

「敬愛するラッタパーラよ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、不確かで、いざなわれゆく』と見事に語られたことは、不思議なことです、驚くべきことです。敬愛するラッタパーラよ、まことにこの世界は不確かで、誘われゆくからです。敬愛するラッタパーラよ、この王家には象軍もあり、馬軍もあり、戦車軍もあり、歩兵軍もあり、それらがわれらが逆境にあれば守りとなってくれましょう。『この世界は、護りになるものがなく、頼りになるものがない』と敬愛するラッタパーラは言われました。敬愛するラッタパーラよ、このように語られたことに、どのように意義を認めるべきでしょうか」

「いかがでありましょうか、大王よ。あなたには何か慢性の病気がありますか」

「敬愛するラッタパーラよ、私には慢性の風病があります。敬愛するラッタパーラよ、ときには朋友血縁が『今にもコーラヴィヤ王は死ぬであろう。今にもコーラヴィヤ王は死ぬであろう』と言って私を取り囲むことがあります」

「いかがでありましょうか、大王よ。それらの朋友血縁に『敬愛する朋友血縁は私のために来て貰いたい。私の受ける苦痛が軽くなるように、みんながこの苦痛を分かち合って欲しい』と言うことができますか。それとも、あなただけがその苦痛を受けるのですか」

「敬愛するラッタパーラよ、それらの朋友血縁に『敬愛する朋友血縁は私のために来て貰いたい。私の受ける苦痛が軽くなるように、みんながこの苦痛を分かち合って欲しい』と言うことはできません。そのとき、私だけがその苦痛を受けるのです」

「まさにそうしたことについて、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、護りになるものがなく、頼りになるものがない』と語られたのです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました」

「敬愛するラッタパーラよ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、護りになるものがなく、頼りになるものがない』と見事に語られたことは、不思議なことです、驚くべきことです。敬愛するラッタ

パーラよ、まことにこの世界は護りになるものがなく、頼りになるものがないからです。敬愛するラッタパーラよ、この王家の地下にも地上にも多くの黄金や金貨があります。『この世界は、持ちきれないところ、すべてを捨てて去らねばならぬところ』と敬愛するラッタパーラは言われました。敬愛するラッタパーラよ、このように語られたことに、どのように意義を認めるべきでしょうか」

「いかがでありましょうか、大王よ。いまあなたは五つの欲望の対象を持ち具えて楽しんでいますが、これからも『同じく私はこれらの五つの欲望の対象を持ち具えて楽しむ』と言うことができますか。それとも、他の人々がこの享楽を得て、あなたは行ないに従って逝くことになるのですか」

「敬愛するラッタパーラよ、いま私は五つの欲望の対象を持ち具えて楽しんでいますが、これからも『同じく私はこれらの五つの欲望の対象を持ち具えて楽しむ』と言うことができません。そのとき、他の人々がこの享楽を得て、私は行ないに従って逝くことになります」

「まさにそうしたことについて、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、持ちきれないところ、すべてを捨てて去らねばならぬところ』と語られたのです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました」

「敬愛するラッタパーラよ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、持ちきれないところ、すべてを捨てて去らねばならぬところ』と見事に語られたことは、不思議なことです、驚くべきことです。敬愛するラッタパーラよ、まことにこの世界は持ちきれないところであり、すべてを捨てて去らねばならぬところだからです。『この世界は、充足のないところ、満足のないところ、飽くなき欲望の奴隷』と敬愛するラッタパーラは言われました。敬愛するラッタパーラよ、このように語られたことに、どのように意義を認めるべきでしょうか」

「いかがでありましょうか、大王よ。あなたは繁栄するクル国を住所としていますか」

「そうです、敬愛するラッタパーラよ、私は繁栄するクル国を住所としています」

「いかがでありましょうか、大王よ。ここにいるあなたのところへ信じ頼れる人が東方からやって来て、その人があなたに近付いて、次のように言うとします。『大王よ、ご承知でありましようか。私は東方からやって来ました。そこで私は、富み、栄え、人口が多く、人々で混雑する国を見ました。そこには、多くの象軍、馬軍、戦車軍、歩兵軍がいました。そこには、多くの象牙がありました。そこには、多くの未加工のあるいは加工された黄金や金貨がありました。そこには、多くの女性がおりました。それだけの軍勢があれば征服することができます。大王よ、征服するべきです』と。あなたは、それをいかがされるでしょうか」

「敬愛するラッタパーラよ、われらはそれをも征服して住所としたいと思うでありましょう」

「いかがでありましょうか、大王よ。ここにいるあなたのところへ信じ頼れる人が西方から……北方から……南方から……海の彼方からやって来て、その人があなたに近付いて、次のように言うとします。『大王よ、ご承知でありましょうか。私は海の彼方からやって来ました。そこで私は、富み、栄え、人口が多く、人々で混雑する国を見ました。そこには、多くの象軍、馬軍、戦車軍、歩兵軍がいました。そこには、多くの象牙がありました。そこには、多くの未加工のあるいは加工された黄金や金貨がありました。そこには、多くの女性がおりました。それだけの軍勢があれば征服することができます。大王よ、征服するべきです』と。あなたは、それをいかがされるでしょうか」

「敬愛するラッタパーラよ、われらはそれをも征服して住所としたいと思うでありましょう」

「まさにそうしたことについて、大王よ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、充足のないところ、満足のないところ、飽くなき欲望の奴隷』と語られたのです。それを私は知り、見、聞いて、家を出て家なき生活に入りました」

「敬愛するラッタパーラよ、尊敬に値する人・正しく覚った人であり、知り見ている、かの世尊が『この世界は、充足のないところ、満足のないところ、飽くなき欲望の奴隷』と見事に語られたことは、不思議なことです、驚くべきことです。敬愛するラッタパーラよ、まことにこの世界は充足することがないところ、満足することがないところ、飽くなき欲望の奴隷だからです」

尊者ラッタパーラは、このよう言った。このように言って、さらに次のように唱えた。

この世界に財ある人々を私は見るが、財を得ながら迷妄のために施すことがない。
貪欲な人々は財を蓄積し、さらに欲望の対象を追い求める。

王は地上を征服し、海ぎわに至るまでの大地を住所としながら、
海のこなたに満足する様子もなく、海のかなたをも求めようとする。

王も、多くの他の人々も、飽くなき欲望から離れずに、死に赴く。
充足することのないまま、身体を捨てる。この世界に欲望を通しての
満足はない。

親族たちは髪を振り乱して彼のために泣く。『ああ、われらに不死が

ないのか』と言う。
彼を布にくるんで運び出し、薪を積み、そして荼毘に付す。

彼は串で突かれ、布一枚になり、財を捨てて、焼かれる。
死んで行くも者に、親族も友人も仲間も、ここでは頼りにならない。

相続人たちが彼の財産を運び去る。生ある者は行ないに従って去る。
死んで行く者たちに財産は付いて行かない。息子たちも妻たちも財産も王国も何もかも。

財産で長寿を得ることはない。また、富で老いを無くすこともない。
賢者たちは言う。『この命はわずかで、無常であり、変わりゆくものだ』と。

富む者たちも貧しい者たちも死に接触する。愚かな者も賢い者も同じく接触する。
愚かな者は愚かさに打ちのめされて横たわる。賢い者は死に接触しても動揺しない。

だから、知慧が財よりも勝れている。それによって、人はここで完成に達する。
完成に達しない人々は迷妄のために様々な生存で悪事をはたらく。

人は輪廻におちいり、次々と母胎に入り他の世界におもむく。
知慧の少ない者は、信じて、母胎に入り他の世界におもむく。

盗人が進入口で捕まり、自分の行ないにより、性悪なものとして打たれるように、
そのように人は、死後にかの世界で、自分の行ないにより、性悪なものとして打たれる。

もろもろ欲望は、美しく、甘く、楽しく、さまざまに心を揺さぶる。
もろもろの欲望の対象に禍を見、王よ、それによって私は出家した。

樹木の果実のように、年少の若者たちも、老人たちも、身体が壊れて、落下する。
このことも見て、王よ、私は出家した。妄想のない沙門の立場こそ勝れている。

11）平川彰『原始仏教とアビダルマ仏教』5-82頁参照。

（平成３年度駒沢大学北海道教養部学術研究助成による成果の一部）